



柴島浄水場 水道記念館扁額 「送水即唧場」

① 田山花袋が明治 35 年（1902 年）年に発表した「重右衛門の最後」という短編小説の中に、

「あれは何だね」

折から子供を背負った十歳ばかりの漢 ^{とを} 垂し ^{はなたら} の頑 ^{わんぱく} 童が傍に来たので、怪んで自分は尋ねた。

「あれア、^{ポンプ}唧筒だい」

と言ったが、見知らぬ自分の姿に其儘走つて行つて了つた。

とあります。

普通、ポンプは「唧筒」と書くのですが、「筩」は竹筒という意味の漢字で、「筒」と同じ使われ方をしていました。

② 天保 8 年（1837 年）に出版された、鈴木牧之『北越雪譜』二編、巻三の、越後の小千谷で天然ガスが噴出し、共同浴場の湯槽を沸かしたり煮炊きに使っている様子を紹介した「地獄谷の火」という章で

さてその火を視るに、一ツの浅き井を作りたるその井 ^{いちゆう} 中より火の燃 ^{もゆ} る事常の湯屋の火よりも ^{さかん} 盛 ^{ふね} な
り。上に釜 ^{かま} あり一間四方の湯槽あり、細き ^{ゆぶね} 筩 ^{ほそ} ありて ^{かけひ} 后 ^{きさき} の山の清水を引き湯槽におとす。湯は槽
の四方に溢 ^{あふ} れおつ、こゝをもつて此湯温 ^{ゆぬる} からず熱 ^{あつ} からず、天工の地火 ^{こう} 尽 ^{ちくわつく} る時なければ人 ^{じんさく} 作の
湯も尽 ^{つく} る期なし、見るにも清 ^{せいけつ} 潔なる事いふべからず。此混堂に続 ^{ゆや} きて厨 ^{つゞ} 処あり、灶 ^{だいどころ} にも穴あり
て地火を引て物を ^{にることたきゞ} 煮 ^ま 薪 ^{ゆか} に同じ。次に中 ^{たけつゝ} の間あり、床の下より竹 ^{かん} 筩 ^{ちや} を出し、口には一寸ばかり
銅 ^{あかゞね} を鉗 ^{はめ} て火を出さしむ。上より自 ^{いだ} 在 ^{じざい} をさげ、此火に酒の爛 ^{かん} をなしあるひは茶 ^{ちや} を煎 ^{せん} じ、夜は
燈 ^{ともしび} 火とす。さて ^{つらつら} 熟 ^{つゝ} 此火を視るに、^{もゆ} 筩 ^{やうくわ} をはなること一寸ばかりの上に燃 ^{つけぎ} る、扇 ^{かざ} にあふげば陽 ^{こつぜん} 火
のごとくに消 ^{きゆ} る。筩 ^{つゝ} の口に手をあてこゝろむるに少しく風をうくるのみ。発 ^{つけぎ} 燭 ^{かざ} の火を翳 ^{こつぜん} せば忽 ^{もゆ} 然として
もゆることはじめの如し。

とあるように「筩」は「筒」と同じ意味で使っています。

「唧筒」も「唧筩」も、音読みは「そくとう」です。

なお、「唧」は「唧」・「唧」とも書きます。